

2014 年度 第 1 回 全体研究会

■報告題目：神道から見た仏教

■報告者：鎌田東二（京都大学こころの未来研究センター教授）

■コメンテーター：長谷川岳史（龍谷大学経営学部教授）

■開催日時：2014 年 10 月 21 日（火） 17:00～19:00

■開催場所：龍谷大学大宮学舎西翼 2 階大会議室

■参加者：32 人

【報告のポイント】

鎌田東二氏は、神道というものが日本の自然というものに制約されていること、そして、日本仏教も神道が制約されている自然条件に基づき日本で発展していったことについて、様々な角度から論じた。

【報告の概要】

鎌田氏は、まず大前提として、神道がどのような特性を持つのかを数々の事例を挙げながら紹介した。

神道は、山・岩・木・滝などの自然物そのものがご神体となり、人間がそれに対して信仰を持つという構図を持つ（那智大社など）。その自然物は、時として荒ぶる力を持ち、時として神様として崇められる対象となる。この神と人間の構図は、日本古代から存在し、万葉集の枕詞に「ちはやぶる神（霊がものすごいスピードで荒ぶって発現する）」という言葉で表現されるように、文化の中に息づいている。その「神」というものに対する畏怖、畏敬の念というのが根幹にあり、祭りと祈りの信仰体系を作り、そこに様々な生態系的な智慧というのを宿してきたといえる。

上述の神道の本質について触れたのち、鎌田氏は、縄文時代の遺跡から出土する「石笛（いわぶえ）」を吹いた。

石笛の特徴は高音を発することである。氏はそれを鹿・鳥の鳴き声を模したもので、縄文時

代においては狩猟採集などの時に重要な意味合いがあったとする。後に中国から伝来してきた雅楽が、日本独自の能になっていく過程で、高音を発するように設えた「能管」という楽器も生まれてきた。鎌田氏は、「能管」が岩笛に由来するもので、岩笛の持っている透明で、かつ激んでいるような高音に対して、日本人が神性を感じ、儀式的・鎮魂的要素を含む能に必要であったのではないかと推察する。

そのような感覚は、『古事記』、或いは「祝詞」では「草木がこととう」という言葉で表現される。この草・木・岩が言葉話す（草木言語）という感性は、縄文時代から日本人のなかにずっと存在し、それが草木供養塔や針供養塔というような形で可視化された。また、その感性は、神道的表現になると「草木言語」であるが、仏教的に言えば、天台本覚思想で語られる「草木国土悉皆成仏」ということになる。

このように神と仏というのは、元来、日本の民衆のレベルでは、「大きな差異のあるもの」として捉えられてこなかった。例えば、熊野信仰は、本宮大社は阿弥陀如来、新宮速玉大社は薬師如来、那智大社は観音菩薩、というように、本地垂迹説に基づきながら、阿弥陀浄土の世界、観音浄土の世界と繋がっている。これは熊野に限ったものでものではなく、伊勢でも同様の事例がみられる。

神道史を対極からみると、一番古くは縄文時代以降、日本列島が出来てから、神自体が習合してきた。神々が習合していく過程で仏教が入ってきたために、神と神との習合のひとつのブランチとして神仏習合が生まれてきたのである。鎌田氏は、益田勝実の『火山列島の思想』（1968年、筑摩書房）の文章を解説しつつ、日本の神が火山列島や地震列島、というような日本の風土のなかで生まれてきたものであったことを確認した。そして、日本の風土に影響されたのは神道だけではなく、仏教も同様であり、日本仏教で用いられる「鎮護国家」という言葉は、単に人間社会の問題ではなく、日本の自然というものにどう関わりながら鎮め、国を守り、人の心を安らかにするのか、ということが問題となっていることを指摘した。

以上のような前提の上に立ち、鎌田氏は仏教へと視点を向けた。氏は、ニーチェが仏教を「心の衛生学」と捉えたことを評価し、十七条憲法、空海思想などを紹介しつつ、仏教の本来的な意味合いは「心の理論、心の哲学」であり、心の管理術である、と位置づけた。これは様々な曼荼羅の世界観にも反映されるものである。一方、日本で作られた曼荼羅になると、そのような仏教の本来的な意味合いは薄れ、曼荼羅のなかにも自然物そのものが神・仏として描

かれるようになる。この世界観が修験道というものを成立させ、神仏習合の典型として「天河弁財天社」などを作った。日本においては、もともと多神的であった状況のなかに仏・菩薩が加わり、さらに多様な様相を呈するが、天皇制も含む様々な政治権力と絡み合いながら独自の統一性・秩序を維持し、連続させてきたのである。

最後に、鎌田氏は、岡潔やダライラマの言葉を紹介した上で、「自然智」という言葉を用いつつ、那智大社が飛滝権現であると同時に観音菩薩である様に、「自然そのものが民衆の拠り所である」と感得するという自然智的な作用、日本の仏教はそれをベースにしているのではないか、ということを述べ、それが神道と親和性の高い考え方である、と結論付けた。

【議論の概要】

長谷川岳史氏は、古代日本で十七条憲法を中心に国作りがなされたのと同様に、8世紀中頃のチベットでも同様に仏教思想を組み入れた法律が作られ、国の体系、人のあり方を提示することがあったことを紹介した。その上で、十七条憲法などといった法律のなかに、それまでの自然と人との関わりを補う側面、仏教を導入した地域における、受け取る側の受容のひとつの内容が含まれているのではないかとコメントした。さらに地震・火山噴火などの神の動きを「神からのメッセージ」という形で受け取ったのか、と問うた。

鎌田氏は、コメントに対して、神道と日本仏教との関係で重要であるのは、神道には神社や森など、はっきりとした場所を維持していく継続性があること、そのなかで神と仏が上手く棲み分けてきたということである、と述べた。また、道教・ボン教・神道という、三つの土着的な思想を比較的に考えてみると、神道は、自然そのものに強く依拠する特徴があり、道教・ボン教などと先祖崇拝・自然信仰は共通している一方で、感性・形態としてはアウトプットの形が全然違うものであり、そういう違いがどこから出てきたのか、というのをもっと複合的に考えていかねばならない、とした。質問に対しては、日本の場合「神が立ち現れる」ということと、「たたり」というものが密接に繋がっていて、そのたたりをどう封じるのか、という非常に大きな解釈枠組みと、神道においても仏教においても儀礼の執行が関係するとした。そして、たたりを解釈する際に、日本の解釈は「理」よりも「情」に片寄った解釈がなされていた、と返答した。

入澤崇氏は、神道とインドのヒンドゥー教を比較した場合、場所が重要であることや、古代

は樹木を信仰していたこと、信仰対象が柱であったこと（日本でも神を数える量詞は「柱」）、また神の現れ方が類似する点などを挙げ、ヒンドゥーと日本神道の関係性について質問した。鎌田氏は、自然物信仰があった地域は、インドだけに止まらず、東アジアや東南アジアに、薄いか濃いかの地域差はあるにしても、割と共通している。そして、先住民の文化、大宗教が生まれる前の民間信仰的な先住民文化は、世界中共通する部分もあるはずであるが、肝心なのは、それをどこまで強度を持って保持するかである、と述べた。それからみると民間信仰的なものが一つの形として強烈に残っていて、かつ連続性があるのは、ヒンドゥー教か神道しかない、と答えた。

碧海寿広氏は、鎌田氏の説く「神々を束ねるもの」としての「日本的一者」像というのが、戦前と戦後でどのように束ね方が変化したのか、ということについて質問した。

鎌田氏は、自身の「時代をスパイラルに捉える」という仮説的方法を紹介し、古代と近代を繋げて同じ構造をもつものとして捉えていることを述べた。その上で、近代と現代の作り方の大きな違いは権力分散であると指摘した。中央集権的に一元化しているのが古代・近代であったとし、古代は天皇を律令体制というものでバックアップし、近代も明治憲法でそれを補強するような形を作ったとした。ただ、戦後も象徴天皇制という形で、権力を一元化しているものの、実態はバラバラであり、いまはそれが顕在化して、破局に近づいているような状況になっていると述べた。

藤原正信氏は、日本史のなかで政治と神道の関係性が自然現象として起こった訳では無い、という視点から、政治と神道の関係性についてコメントを求めた。

鎌田氏はそれに対して、政治的な問題は重要であるとしながらも、「政治と神道」という視点はあくまで方法論であって、自身が神道の「自然智」というものを民間がどのように支えてきたのか、という根本的立場を取ることを主張し、神が民間によって、どのように伝えられ今に至るか、ということから日本の歴史の構造・特徴をみていく、という姿勢を紹介した。

また鎌田氏は、神と仏が民間のなかでどのように共存していったのかを考える上で、密教が重要な役割を果たし、それに対する批判によって生まれてきたのが法然・親鸞であったと述べ、その親鸞の和讃を読む限りでは、親鸞自身の「神祇不拝」という立場は神道との親和性を感じる、とコメントした。続けて、その親鸞が、これだけ多くの和讃を作った理由、どのように詠まれていたのかについて、会場にいた研究者に質問した。

その鎌田氏の質問に対して林智康氏は、親鸞の時代、エリート階層のなかで和歌が流行っていたこと、他方、一般庶民には和讃という方法で教えを広めるのが適当であったことを述べた。また、親鸞の思考のなかには、神祇不拝があるほかにも、「神祇護持」・「神祇不軽」という言葉もあり、複雑ではあるが親鸞自身が「神祇否定」をしている訳では無い、ということを紹介した。そして最後に、真宗の教えは漢文の詩だけではなく和文の詩があったので広がった、ということ指摘し、和讃はあとで節回しが付いたのもあって、蓮如が天台の声明から入れたといわれている、と答えた。

